

朝夷巡嶋記第八編三

庫	6	架	2
番	10	冊	40
40		75	

~ 13  
3093  
38



朝夷巡島記全傳第八編卷之三



東都

松亭金水編次

草菴の奇遇源家の族

道人無為の教を説く

續輯第十五



吉見の冠者義邦の夢菴昇不誘いこそ枝折戸とうち商を入りてくさふ  
若僧がまろ此方へと案内とあるを侍る方々をうの菴の行入りなる  
竹の編て井部とあり茅とりて家根とあり畧はるくて篋單の破まじり休派  
敷列ね四壁ありけと吹入る風さぞ此不染とる傍小小さら煙ありて  
奮る襪子不湯の沸まろ若僧のまろその湯を汲て別ありぬ山路あり  
然こそ困りありけぬ咽と濕りありぬと薦むる中歡きうくて冠者の教の  
乾けまろ不温湯も甘露の如く不号とる二三椀と喫りて彼君もあふ

昭和九年  
七月三日  
終末



鎮守府不在城に合戦の動静を窺ひ不賊徒滅びて塔光仲凱陣とす  
 及び在下元来道世の志の頻りあるまじく人の女児を遺て世を棄かて  
 憶らざり光仲と塔とあるは浮世不要の暴おとくをひこち童は老  
 近く不役の者ふおまきる加世丸と伴ひて人をも城と出の小菴  
 さて祈と遍歴する上野ある榛名の山ふ憶りも異人ふらひその名  
 問へ乾坤道人も太極無形道人との曾て日本の隈々小到らる所  
 び思ひ起し志願と果まき止むとと勇猛小勤行を世の容とす  
 その比はまき俗情の失やまき折ありは家とも興さんと思ふ念慮  
 ありと年と累ね日と積り漸く老荘の念と悟り全く塵世と離るる  
 世間の治乱得失あつては面とらる人の吉凶禍福と悉く掌と指  
 まての火宅と厭ひ果るる和主等世を遊に去るの域不入りて

姿と更なるもの真の道と知れ俗中の桑門かて道とす  
 といふべし。尚道と果んとあつて吾不修て修行せよ半年ふて自然  
 所ありん。その説極めて理あるまじく道人不随従て左利と究  
 小人回世の景勢の浮める雲不異あつて今その漸と困るるまじ  
 ねども。藝成厭ふまじり。然る小尚小のゆめ。道人は足下ふ  
 とも因縁ある者あまの危難のあんと頓察し心を用ひらるる  
 神技妙算雲と叫び風と起し鬼神と役使することあり。その  
 真偽と決らまぬあつて。疾のまき道人の譚とす。その  
 語もまき義邦の治めより。然るまじり推せり。今躬名稱と  
 避て額著る。佛の廣細大人より。宣ふまき経任滅び凱旋の  
 首のさし遺して世を道とらるる。光仲の及まき。朝夷義  
 朝夷義

徳士かまろす下下す心と痛め手と頌へは性方と探せり。と。聊の手  
 掛りの夫より後の東西の疆どふも知られぬ。歎くをうて詮方あり。夫より  
 人光仲および在下すも。容小豫倉へあせり。処箇様との死難ありて。脱  
 鯛せしむ。義秀の朋友の信とて扶けし。一伍一付の長物豫燃りし。こ  
 波の光仲と指り吾所の人細や。不結り。初て在下の武苑ある。石戸の莊  
 と充行いと近曾入部せ。処如此とあり。今日ふ。あつた。と物う。こ。度徳  
 い。安果と吾所の初より山野の家。人の交里とあつた。空ろ。風の吹小も  
 夫等とあつた。とあり。し。師の乾坤た人のぬ。何あり。是とあり。將軍家の暗  
 弱あり。ま。北條家の佞邪あり。脱ふ。不及び。と。結り。あ。ひ。今足  
 下の物語と。一点も差ひ。を。合せり。師の室を。出ず。と。箇計りの。と。あり。と  
 ま。い。実小當世の神仙と。ま。足下。身。の。災。害。と。未。然。小。察。知。と。あり。と。

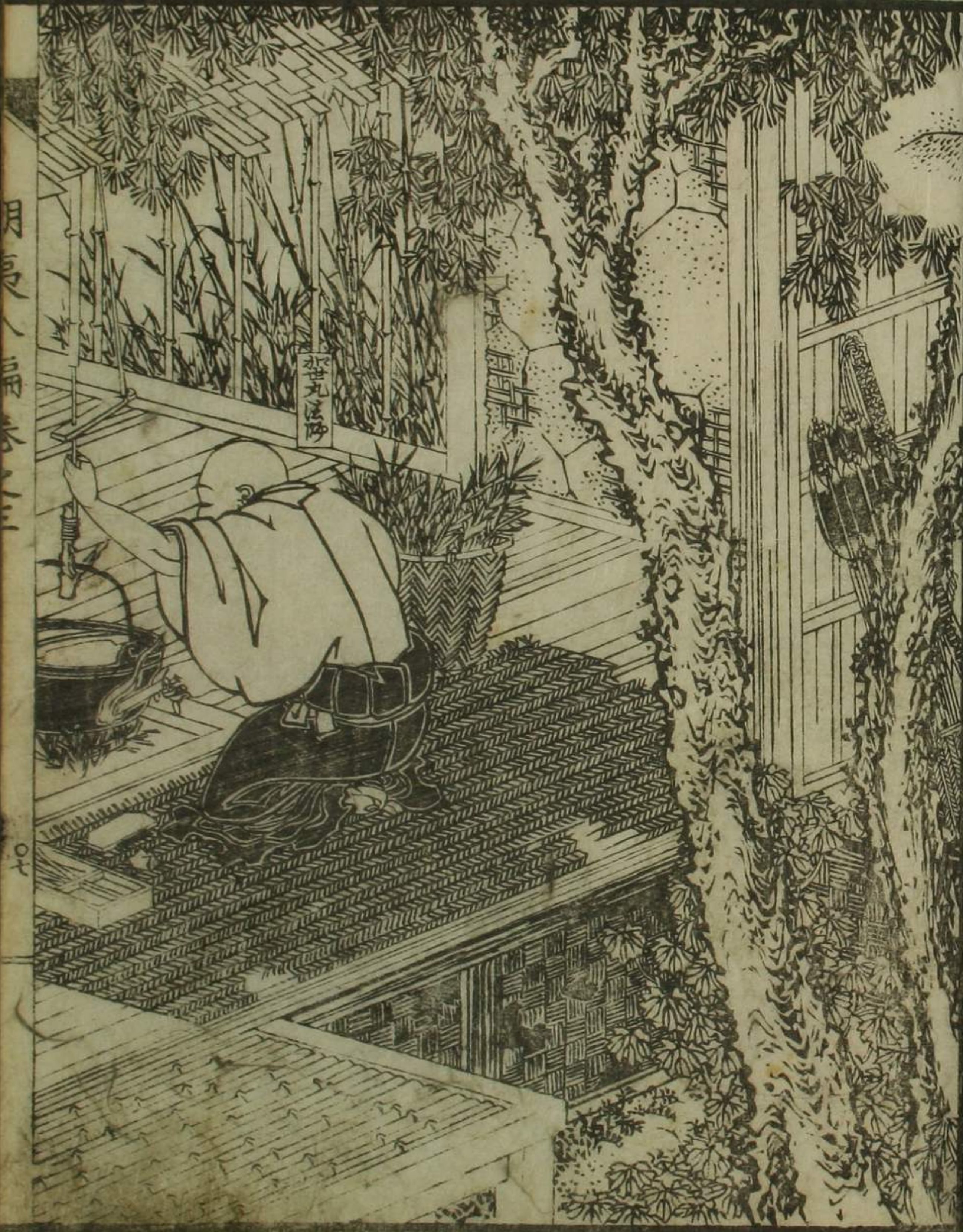
ま。ま。毫。髪。の。差。ひ。あ。ら。ず。ま。ろ。頓。め。ま。て。見。奉。し。の。後。の。と。の。向。へ。と。義。邦。と  
 誘ひて。ま。ろ。出。る。の。内。に。ま。ろ。白。と。明。し。ま。り。初。て。夢。交。昇。が。案。内。小。う。傍。り  
 菴。の。う。ち。より。徐。と。ま。出。る。の。乾。坤。た。人。を。脱。道。服。す。の。の。の。纏。ひ。小  
 一。條。の。杖。と。携。え。鶴。髪。あ。り。難。え。白。銀。の。計。の。か。り。実。小。寿。の。百。葉。小。の。ゆ。か  
 う。と。り。ま。ま。童。顔。あ。り。その。容。貌。怒。麗。多。り。冠。者。へ。つ。る。より。貴。さ。を。拜。せ。ん。と  
 ま。ろ。その。も。捕。へ。ま。ろ。上。座。小。居。の。道。人。未。坐。小。後。と。做。し。と。在。下。の。君。の  
 父。蒲。殿。の。内。あ。り。三。の。者。と。呼。ぶ。當。麻。太。郎。弟。あ。り。在。俗。の。名。い。當  
 麻。瑳。次。郎。房。光。と。ま。ろ。ま。ろ。の。脱。小。故。殿。北。條。等。が。好。練。の。説。小。より。寛。心  
 被。り。あ。ひ。と。ま。兄。あ。り。太。郎。の。つ。も。ま。ろ。その。虚。実。と。明。さん。俱。小。傷。と。後。り  
 營。中。の。床。小。忍。心。小。便。宜。と。寂。小。不。江。間。義。時。小。人。志。ま。ま。と。脱。小。殊。と  
 票。小。ひ。ま。ま。頃。在。下。の。局。住。め。と。ま。ろ。小。其。ま。ろ。幸。ひ。小。免。れ。浦。殿

伊豆の修禪寺のすまゐり小蟄居とまひりとありて故郷こきやうと迷ひ出熟世間じやくせけんと観みむる人の  
 禍福くふく榮辱えいじやくの善惡ぜんあくの東あづま小ありて。時ときの幸不幸さいふさいふのこころ今いまより仕つかまつる事ことあり  
 名な揚家やうけの興おこるの志こころと播はる境さかい小控おさへんと。以もつて出家しゆけとあり。修しゆす  
 の苦行くぎやうとて道みちと修しゆするところのふと。元もと来きた浅智せんち鈍才どんさいなる故動こどうする。世利せり小  
 東あづまとて胸中むねちゆう小粗惑こそくひと生なはる。自躬じこん滅めつめ。或ある異人いじん小徒たひて。修しゆす  
 二十にじゅう餘年じゆねん。今いまの漸しぜんく六通ろくつうとて。世東せとうの浮沉ふちん治乱ちらん。廣居くわうきよとて。修しゆす  
 及および。いよく堊世えせ火宅かたくとて。今いまの法師ほふし小あり。修しゆ檢けん小あり。性じやう考かうの役やく  
 優婆塞うぱさいが比ひひあると。神佛しんぶつ儒にゆう及および偏へんらず。乾坤けんこんとて。家けとあり。山川さんせんとて。器き  
 とあり。勝地しやうぢ小控おさへて。无為むゐと樂らくしむ。然しかんと。年ねん主しゆの演えん猶じゆう王わうとて。免めんれとて。因いんて  
 四海しやうかいの无むと。必かならずひ世東せとう太平たいへいとて。欲よくふ。然しかんと。頃ころ北條きたじやう氏うぢ日未ひみ小倍ばいと。好この  
 小裏こもり。既すで小主家しゆけと。願ねんけて。吾家わがけと。富とみんとす。故ゆゑ小君きみの蒲殿はふでんの平へいと。嫡ちやく子しと

りて。忌いむる。蛇蝎へんけつの如ごとく。事ことあり。假託かりたくとて。衣えり。あると。下したに。君きみの温厚おんこう  
 とく。篤実とくじつあり。幸さいの名なと。する。而しかり。ま。世よの人口にんこうと。憚おそる。這こゝろ回わい石戸せきとの寒郷かんきやうと。食しょく  
 邑いと。あり。一いつの連枝れんしの好このと。表あはへ。一いつの君きみ小安堵あんどせ。め。その心こころと。和あひめんと  
 する。こころ。是こゝろは。源げん木ぎが。軒けん棟どうあり。然しかる。小宮みや小四郎しじやう弘義こうぎ後ごと。石戸せきと小望ぼうと。あり。と  
 以もつて。小宮みやと。失なひ。北條きたじやう氏うぢ小歎たん歎たん也なり。北條きたじやう氏うぢ小密みつ意いと。示しす。若し義邦ぎぱうと。失なひ。その遺い  
 跡あとの。子こあり。董どう次じ秋あき弘こう小賜たまらんと。小宮みや小四郎しじやう君きみと。圖ずと。勤つとむ。と。遠とほ  
 回竹塚かいしゆくづかと。一いつの。小住せうぢゆうむ。陸陽りくやう推歩すいぽ小名なと。修しゆ及および院いん酷残こくざんの。昔むかしの。安倍あへいの  
 晴明はるあきも。越この。國くにの大徳だいとくあり。彌や亞あと。法ほふ肝かんを。佛ぶつと。究きゆうむ。り。の。故ゆゑと。こ。小金こがね痕あと  
 資財しさいと。具ぐへ。君きみと。咒祖じゆそせん。と。憑よむ。酷残こくざんの。利り小眼がん瞑めいと。神かみ養やうと。君きみと。床とこ  
 小埋こみと。五ご輪りんと。手てと。小做せさんと。す。と。邪よこしまの。正ただ小勝しょうと。難がたし。因いんて。且かつと。其そのの。意いと。竟つひ  
 小邪よこしまの。邪よこしまの。身みと。失なひ。あ。吾われの。と。疾はやと。暁あけり。既すで小後ご念ねん小在あり。

時より小御とて左右侍らる。その御と壓するがゆゑ昨日狩合の時  
 隠川あてかの小御と失ひしやう。妖魔の邪術忽地おそれて尻小瓶と現し  
 倅あゝんをせよふかの小御あゝんを且く妖魔と退させし。その是に舊者  
 お報うまうりの寸志あり。當下冠者の勇も舒まず。妖魔を撃んとせしは  
 渾身瘠て手足動ず。まは彼邪術の奇特ありて邪とて之も往應あり。其  
 行不應あうらんや。不佞舊好お報いんとして丹心と抽する。その甲斐ありて恙なき。  
 自他の歡び何あり。まは加ふるこいひと。一始終と説る。かた冠者の當るの  
 うち。まは夢つる心地とてその不可思議と感し。吾君ありて初まら。巧まれ  
 ると二点あるも。尻小死地お祀する。道人の情ありて再生するこいひと。  
 この恩お應ふべし。お祀しきま中の考とて。彼小御並松あり。未然とて。小御  
 とぬ。まは情と覆らせぬ。かの六念の故ありけし。狗のまの狗あり。まら

ら。頼るその所謂とて。まは欲とらひらる。道人等つて小御と不佞昔九  
 別ふゆき。その屏路小四圍と違ふ。まは大神の御とあり。吾君とて。お祀んと  
 或人お祀し。字びらる。悉くまは邪術ありて。一も取べき所あり。まは大方あり  
 学びと畢む。彼地と退き山陽山陰北陸等と遍歴し。まは。今君の御小  
 及びまは大神の法とて。一も小御と現する。まは。一旦妖魔と遊る小御。則  
 その法術とて。お祀し。まは。聊その功あるお祀り。まは。お祀りて。古くまは。人  
 法。まは。邪術とらふ。まは。その用うる所。お祀りて。全く邪お祀り。まは。者あり。まは。世  
 間善お祀り。悪とまは。悪お祀り。善あり。彼今。今北條氏將軍。暗  
 君ありて。まは。花戲とて。好まは。然とて。その父子。勉めて。國家の大任。お祀り  
 まら。まは。実小周公且。成王お祀り。まは。如く。まは。まは。その実。漸く。まは。眞奪する。の  
 意あり。善お祀り。悪と。巧。連枝と。整。功。臣と。黜。けん。と。計。まは。朝の正。お祀り



月夜八編卷之三



月夜八編卷之三

一睡の間は義邦  
歡樂と極む



あまた君もその奸謀不斃さうんとするの一人あり。嗚呼危ういふ事難い  
 うる今不佞が初不隨ひ。云々の境更に入あり。予身不於て天年と保ち  
 且子孫連綿とせん。然るで恩愛と名利不羈ま。俗並不交りあふ。一  
 命に基不縮まり。子孫断絶して祖先の祀り。永く絶んと必せり。不佞粗末  
 然と存ふ。かまきせども凡心あり。更不信用あり。故うん。その説く所は  
 大うと成りあり。実あり。信せし。然れども。這回の阮雅宮小  
 四郎が修道院と國に隨まんを。一と。予が。は。知らぬ。を。不  
 あり。是と。諷り。並松と。遊。り。現。神。仙。の。徳。あり。予。し。て。誰。う。と。思  
 為。ま。さ。か。る。奇。特。の。あり。と。思。ふ。後。来。の。事。も。誣。へ。う。ん。如何。あり。ん。と。壯。狂。平  
 條。の。糸。の。健。き。や。更。不。その。解。刑。を。を。ん。默。然。と。を。居。り。予。が。後。る。事  
 蒼。井。不。對。ひ。今。先。醒。の。倫。あり。大。不。感。心。あり。予。の。下。下。ま。う。試。と。ふ。事。も。と

言ひ。一。と。人。の。世。の。の。や。妻。子。從。類。を。思。ふ。故。の。然。る。一。個  
 莖。と。避。く。云。の。域。入。り。も。妻。子。從。類。の。歎。を。と。ん。べ。これ。も。ま。ま。と。思  
 雅。然。ま。ま。傳。へ。る。采。陀。太。子。妻。子。と。棄。て。壇。特。山。入。り。の。苦。行  
 一。と。成。道。し。り。ん。そ。の。衆。生。と。濟。度。の。為。り。未。代。法。祖。と。ま。り。これ。の。僅。小。一  
 身。と。易。く。過。る。事。も。更。不。世。界。を。益。を。ん。と。武。門。小。生。る。者。は。弓。馬。と  
 家。の。藝。を。り。緯。あり。命。と。忘。れ。妻。子。と。忘。れ。と。征。天下。を。み。と  
 清。う。り。宸。襟。と。休。め。奉。り。志。と。け。り。丞。相。太。保。の。職。を。授。り。名。成  
 挙げ。祖。先。と。輝。す。こ。の。忠。孝。全。く。若。志。と。得。る。事。も。寒。く。不  
 潜。こ。り。一。羽。と。終。る。事。も。と。人。奸。謀。の。徒。あり。と。吾。と。獨。を。惜。む。  
 行。ひ。と。正。る。事。も。何。の。思。ふ。事。も。存。ぶ。事。も。如何。も。不。得。い。人。の。論  
 論。あり。後。の。い。ね。の。い。け。と。夢。蒼。井。の。笑。て。足。下。が。初。極。め。て。了。す。

然もこのことを見て名利不羈が人となり。古昔巢父許由が洗ふ。量道徳備り。世不立雅らず。隠る。却て人の貴し。人の然る。人の志を不不あり。強不勸め強不誠む。たさありあ。たさ。頼政の裔あり。多も柳營の連枝あり。世の景勢を厭ふ。最老の女兒と棄て。人の人。門不控。九依の樂をむ。竹の酒食を。係竹管弦。或ひの妓。妻妾を愛し。ま。子孫の榮。末。或ひの莊嚴美麗の家室。輕微の衲褥珠玉の枕。或ひ官位の進む。或ひの他。道。道徳と修。樂む。言葉。以て。尽。開。曉。今。説。と。その。詮。あり。已。と。日。素。凡。夫。あり。父子の。恩。愛。を。世。間。の。人。不。公。む。ゆ。や。さ。と。い。棄。る。不。君。び。さ。の。情。の。あ。ま。ど。日。世。利。不。曳。と。碌。と。る。その。中。不。ま。と。彼。嫌疑。と。稟。る。不。至。ら。ば。祖。兄。の。外。光。と。ほ。す。り。因。

道世の志。先年より頻る。と。不孝の罪。と。心。ま。と。今。ま。果。さ。り。を。脱。不。光。仲。と。塔。と。て。世。不。思。ひ。罪。と。多。頼。不。道。ま。り。の。不。そ。然。る。不。光。仲。の。大。功。あり。て。寸。罪。も。と。身。も。多。彼。釘。針。不。陷。り。て。已。が。家。海。に。入。ら。ば。と。波。然。ま。と。の。食。邑。あり。太。田。の。莊。と。その。俸。不。放。と。と。の。以。茶。已。が。世。と。適。ま。り。故。之。倘。光。仲。と。諸。共。不。後。念。人。あり。ま。ば。如。何。不。あ。る。ん。と。圖。る。今。ま。ば。孔子。の。苛。政。の。虎。より。猛。と。宣。ひ。り。の。も。の。ひ。多。柳。子。厚。蛇。捕。ふ。者。の。説。と。多。死。と。犯。り。蛇。と。捕。ふ。と。以。て。幸。ひ。と。あ。せ。る。と。酷。吏。の。苛。政。不。遠。さ。る。が。故。之。豈。と。ま。か。人。情。あり。ん。や。足。下。の。多。思。惟。と。後。来。の。无。多。と。圖。ま。り。の。畢。て。然。然。と。當。下。乾。坤。の。人。の。東。窓。の。日。射。る。を。貴。客。定。め。て。勞。ま。り。人。不。空。腹。あり。ん。と。棄。る。と。と。今。ま。あ。る。す。人。の。煩。悩。と。進。ら。せ。ん。不。ま。ぐ。且。く。甘。ん。ん。勞。と。と。懃。め。り。人。と。候。る。

箱のうちに栗稗をど難へる。穀物と把せし加世九法師小分付て是を  
 炊くその間小道人の夢養を伴ひ何事の行と修をこして一回の復れ分  
 けしは冠者へて一個小あり。言葉敵あつては精小渾身の芳とて言ふを  
 吾小もあつては同睡り。加世九法師をよこさるる。彼も小分余とて出行  
 者ぞ脊小うち著さる小冠者へてまきえあつて時の間小熟睡せり。是て  
 一晌をりて過ぎ。ては疾熱せり。快小眠もな揺起さん。行  
 得とあつてはひりり加世九法師の曲突の傍小書お披きこつて小念を  
 其折る。冠者の目小志と揚嗟苦一と叫び。眼と入ひてを四をて  
 祝う。いと猜疑ある面持あり。加世九法師のま小後をて書とさし。わき  
 冠者と看てつり。あつては心地の悪とあつて。同とて冠者の影と小胸お  
 沈め吐息吐き。傍の夢をありける。とをりてを復歎息す。加世九

法師の膝を進め。物小魔のりともひ。修道院が邪術とをさつて。辛  
 きあ小遭ひ。心小染てそれとて。夢多ひ。あつては冠者の影と  
 あつては不測の憂とつる。実小頃刻の間小て。人生百年の栄枯と場  
 ち。尚小道人が懇小示し。あつては凡俗のいま。半信半疑ある。い  
 奮のふ小あつては粗悟す。あつては一期の歡樂栄曜は。水上の急小舟  
 ち。まきこ。朝露の果敢ある。あつては哉と歎息し。加世九法師あつて  
 び。開のま。あつては夢とつる。あつては苦。あつては煩。あつては  
 炊きこ。あつては進む。冠者の法師小一礼して。ま。あつては味。あつては  
 物語。長とつる。あつては。あつては。あつては。あつては。

續輯第十六

邯鄲の草菴の夢語  
 石戸の旅寓家族の歎き

そと般若の銘文あり。如夢幻泡影と説きて夢の果敢るなりとの事なり。然れども上代あり夢と以て懲とせしこと。和漢ふその類寡るるは就不應神の聖主とて夢とてん宝祚と定めりひいひあり。太宗の魏徵南帝の捕らまはるのよき祥とてその解投擧不違あり。當時平尾山墓の妹の後を購ひて終不幕府の山墓とあり。あつても物ふんえたり。さて同話休頼吉見の符者義邦の加世凡法師ふらち對ひ筒不吾勞ま。まふ不間睡ともなう熟睡しぬる。寝たりとらふ身不覺えん。昨夜辛と目不遭しより。漸ふ老に石戸不歸り。妻と始めを解の人不。在一容と物語り或ひの殆と或は怖れ。まづ恙あることを祝し祝さしと明し暮とて一旬あまら。一日不不農人等奔走して孫念より。畠山刀称安達刀称との解刀称原成改とあり。装いも花々をたは使不下向のよりけり。計らひまうさんとの憶あけまはる。まらち

後けと緯急あり。何と准依とてさる間あり。農民們的茶内ふより。件の諸士等威儀とふま。宮小四郎が家不未り。客の回不居流とて尾山墓の命と直示吉見刀称ふ言とて。とありて下向せり。頼不拜謁と勉むる。そのま更ふ分とて。粹とてさるあ。まら。まら。彼等不相見する。各未坐不平。まら。まら。伊豆の修禪寺ふ幽閑あり。乃て生害と勧めま。せし。才実朝卿の家。海と副あり。あふ右大臣拜賀の夜公曉のる不弑せ。ま。今不幕府の血脉絶。不。尾山墓の命あり。君とて正ま。故右幕府の山。甥とて渡らせり。頼不渡。あり。四代の將軍不立せ。人故不臣せ。とて。途ひく。て。差紙。ま。本不。君速不。終容あり。自化の歡びのこ。ま。天下の僥倖と。恭ま。額著。て。致。ま。他日不異あり。然とて。無知短才あり。争。孫念の主と。ま。と。再。三。辞。ま。更。不

許こまて秩父重忠進出今暴おかきまう廿六の猜疑の条なるまこと今  
 まじらるや。既右幕府の血脈を不於て絶んとす。因て君を薦むる不且  
 媛の故伊豫守義経君の女見旁に君の他小誰う嗣君あるりのあらん  
 辞のあつたふあつた頃と薦むるぞ。今の辞を之を初めり。然いと後  
 余に到りたるふ。疾より京師へあるとて奏し侍にありたる。程るく勅使下向  
 ありて征夷將軍の宜下あり。雀媛の三位小叙せし昨日の辛苦今日の采  
 花の掌に返すかぬく一朝小志を得て上るたゆとありけりまこと。程むじ  
 憂うりしゆを忘まきむに恨とて。猶やと省き且暮る民の艱苦を恤むと  
 不世の賢君と教ひ貴とと四海のよく泰平ある。万念のめくあり。そは渴  
 たる者水と素め。水小飽が湯と思ひ。湯小飽とまの酒と思ふ。こま人慾れ  
 慣ひあて既小志とゆふ不及び何れとる心池と。此の將軍の貴き小居り

箇斗の樂とら。苦くしと折る酒宴と致け嬉焼る。美女とら  
 舞唄のせ粗粒真とるけり。その舞妓の挂とら。年の以十八九小  
 きて。蟬娟とら両愁の翼小殊る。眉の遠山小没んとす。朧の  
 氣と摸。丹花の唇芙蓉の眸肌の城の雪より白く。姿の凡小靡く  
 岸の柳ののうのととら。美人ある。何れとる心と願け。最老  
 の妾とる。程るく子と産。まに雀小夫より後救多の児と産  
 ぬま。営中自然振ひて。まに若歳の春と謡ひ千歳の秋と唱へて。竟  
 えび三十餘年と経る。子若の各成長。或ひの妻と迎之臣下小列に  
 その子その孫次弟小繁。まに救多の星霜と経。眞ふれが星霜より  
 あつて五十餘年あり。吾歳日や八十小近。まにその容貌更ふ  
 昔の容ふ更らず。加護の健あり。加護雀媛の桂もまに





罪深く死せりて構へ他いありと。ときと泣然と泣き。當下に心小るる。いかに  
 ありと義時と匡媛と忍び逢ふ。粗凡にありあり。証候とありあり。かたき  
 その侍小捨おとすと。這回果て高代あり。最愛ある桂女と失ふ人とならる。茶  
 家する小桂女。その性伶俐の故。不両個が性。景勢と幽入。りのるる。へ  
 ら不於て鬱悒あり。堀藤次小密意を示し。失いんと計るる。桂女年頃  
 せむせむ。匡媛より有りて在り。然るに今も匡媛とや。その頃暴ふ。何れ  
 りと。妬心を生じ。然るにその本小密會の。不依て起るる。その所不良  
 の行ひあり。その妨と。人々を厭ひ。吾鐘愛せる側室と害と。する悪逆无道  
 争う。とて救さんや。と怒り。心頭おろし。その翌日匡媛と吾も。不掛て刺  
 殺し。以て汝の不老不死の薬。さへも調ひぬ。と。その血を把て。茶小雜へ。今より後  
 千萬年死せると。いふと。あると。と。密夫義時。そのも。不や。の指へ。宮

中兵と伏せ。失りんとせ。と。渠そのこと。洩せ。所勞。号。之。在。て  
 ら。さ。び。困。便。宜。と。窺。ふ。所。夫。より。毎。夜。匡。媛。の。幽。魂。宮。中。小。現。れ。て。種。と  
 の。奇。怪。と。す。因。て。諸。山。の。高。僧。お。その。祈。り。と。命。せ。ら。う。と。あ。り。く。小。立。も。本。ら。ず。  
 終。小。桂。が。咽。吐。と。啖。ひ。を。彼。と。殺。し。り。初。て。の。い。ま。と。飽。足。ら。ず。也。その。産。す。所。の  
 子。その。餘。胎。腹。の。子。孫。小。至。つ。て。三。十。餘。人。一。時。小。死。せ。り。吾。大。樹。の。任。小。登。り。五。十  
 餘。年。が。その。間。更。小。憂。へ。と。見。せ。と。多。く。歡。び。の。と。多。う。り。も。後。其。の。世。の  
 慣。ひ。親。族。多。く。死。果。て。傷。と。断。哀。別。離。苦。細。小。尽。く。さ。る。も。あ。ら。ん。ば。匡。媛。執。念  
 と。怨。靈。の。責。縁。と。す。所。為。と。い。ふ。人。本。と。推。と。す。の。義。時。小。起。り。と。禍。ひ。を。り。  
 然。ま。い。渠。と。滅。せ。と。の。將。憤。と。散。せ。ん。と。密。小。軍。勢。と。催。す。所。渠。免。早  
 く。も。こ。と。と。知。り。暴。小。多。勢。と。促。集。め。無。二。無。三。ふ。ち。困。む。此。方。い。い。ま。い。入。り  
 期。せ。と。在。合。へ。兵。あ。て。防。ご。う。と。風。上。小。火。と。懸。せ。り。故。小。空。小。噉。ひ。り。







國家と喪ひぬと滅ぶに至る初め不障の善ふより後大障の悪と致す  
 と天口止觀の要文也。この心とらるる古今の人情の弊と免るるを  
 一とてべし。然るに初めより可なりならず不可なりたる中と世間の安んず  
 取ら昇俗の常言不也。死すこと貴人とならざるを。凡そ始めあれば終あり  
 昼夜長短も毎小消息のなれと能はず。固く吾輩の修む所云ふなり  
 樂とす。美為一内の栄不誇りて。後の悲と俟べしと諭さして冠者ハ  
 点改りて邯鄲の旅寓を五十年の栄枯と曉まる。盧生が故より不彷彿なり  
 實一期の歡樂の二朝の露の如し。在下篤と思惟して。今より先醒の徒  
 才とあり。夢寐弄老人と諸共不世と避んとせん。許容ありて大業ある  
 とのふ道人も歡びて頓て行者ふらるるの戒と授けぬと教て家不修れ  
 念と断る。業下某生再説ら不波宮小四郎父子の者ありて馬標吉

郎ハ林原小池由りて果て鹿のありたるあり。這ハ屈竟の獲物と大不  
 歡び逐逐めりて。刺留ると二三匹今日生憎不獵みて。と云ふとせん  
 たる。薄暮不及及び思ひかけぬ。獲物ありて珍重する。と頓て列年  
 擔いせとらるる時。不風雨頻り不起りけり。各兩具の準備する  
 ぬ。心急ぎて馬を鞭あて弛出ん。と云ふ。筒標吉郎ハ主不のまて在る  
 が右不左不心不か。鹿の出る小獵人もせず。を彼方と願う。心不  
 所不農民們西三個喘走り来て。標吉郎が傍不近づき。刀称不も  
 らせぬ。心不ありたる。並松との小狗が。隠し河をた流さ。不便と思  
 えてその往方と云ふ。彼方へ池の周く君達。俟ぬんと下僕們と云ふ  
 知世。あつたの程。刀称の所へ来ぬらん。と云ふ。標吉郎ハ  
 点びて。然らば暫くらあて俟んと。ひの樹蔭小馬ひと廻ら。雲の慧てあり

け新不曇り空の猶暗く大風さ吹出て雨ハ車油と流をさう不降来  
 不けま標吉郎もふ得様を逢る此方白馬のあつと人つけそれ  
 軒下不屈をいふ弘義父子の者その他列卒も雨風不  
 とあり果て眼不遮る所一人一個のあり殊不日さ暮果て物の善  
 悪も分がさふ雨のましく頻あり行者の何とて初遅さこの雨風不障ら  
 まで困下果つ在さうんと心も焉不あねどもその路と入辨へま今まを爰  
 不集ひる雜人等もと何方へ隠ひてその按内とささる者もあふれが  
 心煩不焦燥の更不その淋と知らず遠近のさの間の不居を府  
 者ダ便宜と俟とらむ日暮てその憑も失うとて独活て白亭と祝  
 までさう不五十餘りの老媪二個糸繰居り標吉郎の声を吾ハ如此の去  
 あつ急雨不遭て雜美せり且くさ宿てんやとて老媪のちあがり。さことら

辛トあふらぬ妻来此方へ入らせりと巾着と板敷と掃きどり歡ぶ  
 標吉郎ハ尻うち掛て常把巾濡る所を拭いてさう温湯と洗と思ひさ  
 ぬ暴雨殊不風さ強けま辛ト果て不憶阮介もあつと久し老媪の面を  
 らの郷久く頃主の在さうと頃吉見さあつと頃主もあつと及ぶさ  
 内のは方る今より永く恩も被るべき吾們のを阮介と名へ先  
 媛と雨風の止む間と焉不俟あつと此頃の荒屋あ何進らすべし物  
 ら背戸の柴栗二箇三箇法と焼てまあせん。と筐の裡より出す標吉郎  
 手と舉て心る選ひを腹より。你が如く昨今刀柄の内部のありさ。土地の業  
 内はさうく知らぬ今日ハ武人の勧めあて待念とせしは刀柄と我ハ  
 其めん性方と定ふせん故不此処を不呻吟あり。是より東う辰巳の方不隠川と  
 知してあんその川と越て水下の何と人斬あまさ成子の道程う知つてあふ



吾們が禍ひの端ありしと嘆きを頓て小四郎おちち對ひておん胸を打ちて  
 古く住む土地の按内いよく知りてん今より馬飼標吉とめて狩者か  
 索ねて孫ねと突て弘義その子董次秋弘口と拵へその作せぬ及ぶべし  
 然るが今夜陸とらぬ殊ふ風雨の烈く炬火ぞ滅さるべ只呻吟の  
 詮方あるん東雲をむむはよくて人殺と引俱し此方と索ね人の易く  
 へ馬飼ぬお語する老温への聴怖ういざ知らねどこの郷ふ然る處に  
 るもの有べさうの雨ふ辛くおん胸をささる鏡をかけてんる  
 如し心易く思せよと笹媛を慰めてす夜の俱不寝もさす暁と俟に  
 けり



朝夷巡島記全傳第八編卷之三終

